

增補外題年鑑目錄





門加 18
瑞 1255
卷

増補外題年鑑目錄

○古流井と播磨極分

○同 門差井と市部を吏分

○同日 清水理之務分

○日 山本古佐極角を吏分

○同 門差松本治を吏分

外題年鑑



○ 恒 日 都 志 吏 一 中 分

○ 日 志 古 路 國 志 吏 分

○ 日 固 本 文 弥 分

○ 日 門 才 阿 波 志 吏 分

○ 日 字 浪 加 賀 極 志 吏 分

○ 日 門 才 野 田 若 狹 富 松 薩 摩 分

○ 日 恒 津 嶋 文 四 日 依 志 吏 分

○ 日 道 具 屋 志 吏 分

○ 日 表 具 又 志 吏 分

○ 日 南 流 竹 本 志 吏 分

○ 日 恒 若 志 吏 分

○ 日 明 石 越 志 吏 分

○同 陸竹小和泉 分

○同 江戸を竹肥前板 分

○同 京都竹本義を主在之事

○同 大坂諸所古澤瑞瑞坊始之

○同 高派祖竹本後板 分

○同 豊竹越前板 分

○ 貞享 元禄 巳未西在替淨瑞瑞初日年月日記

○ 古今を主受領年月記

○ 西在を主出在退在之事

○ 出張出を始り之

○ 時代事世後瑞瑞始り之

○ 出張を主ワキツ三後人形出を日記

○芝居の表に幟進物ホホ来之始り

○乃々相言道具建之事

○舞臺小幕ヲ引初る事

○正座と床と換本ニ悲ス時ある事

○あなづきの始り事

目録終



○右流井と播磨板 井上市子氏を分

新十二順 是右の十二順と
ゆふきりしと

二王の市地

日本如

是中右の
二王如と
ゆふきりしと

舟遺恨

要所のふり
歌対のふり

女神鏡

是ハ右の
女神鏡と
ゆふきりしと

都女商人

歌下場
歌とゆふ
きりしと

二親孝行

是ハ右の
二親孝行
とゆふきりしと

全平法同降

白旗の中来

八幡を
ゆふきり
しと

敵討乃建恨

五天竺

祇園精舍

天鼓

大友真鳥

日本王代記

荏柄平石

神道秘通

百合若磨

甲賀の二帝

源平恋の連恨

道教禪師傳

長谷寺利生記

土蜘蛛退治

金剛菩薩文子力

兵庫の繁盛

二代乃敵討

田村將軍初親音

利屈お徳

一休物語

頼光跡目論

源氏繁業合戦

根元乃我お徳

雪隠太子傳記

業平一代記

源氏契田合戦

損義北國落

花山院物語

損朝七張落

菅原親王行状記

蒲津曹司東路哥

金剛山合戦

大弓我留士牧将

賢女手習鑑

日向系流

信濃源氏本多軍記

大職冠知畧王取

大念佛由来

三浦北条軍法競

楠千早合戦

河津相撲の遺恨

東大寺大佛縁起

佐々木後戸先陣

三浦大船老後巻

源氏十五候

井上市房室

五大力菩薩

日

待宵物語

漢水理唐

源氏東乃門出

上東院 右同

松浦五郎家日記

井上氏一生之強_レれ一_レ淨_レなり而_レ余_レ數_レと
そ_レと_レ中_レ西沢氏の操_レ年_レ代_レ死_レて_レ又_レ一_レり_レた
予_レ又_レ史_レ及_レび_レこれ_レを_レ愛_レこ_レむ_レる_レ
追_レて考_レへ_レる_レさ_レか_レみ_レたり_レ

○山本土依椽

角太吏
事
花
松平浪左吏
都左吏一伸
分

角田川

小燈籠

天親菩薩

おまの
おまの
おまの

阿漕平次

傳教大師記

王熙春

清水晴玄

源氏蓬萊之物

三条小艇

女人往生記

久米仙入

都志王元

彈丸の近

天王寺被寇中目

長光寺田帳

信田小左郎

信太妻

熊井太市孝好奏

西教寺七方日廻向

一心二河白道

小敦盛

袈裟被

小栗判官

逢坂王子接車

周備堂用帳

眉間天拍張

石童丸

浦嶋左郎

八麻大臣

四十八願記

平親王将門

花山法皇順礼記

袈裟衣前拍張

酒吞童子

日蓮聖人修行記

高砂

松本流をま

牛若東下向

源氏馬帽子折日

三ツの人形ニ初て足と替り

石川又左衛門 有

彌念社日記 日

八嶋合戦 日

清水寺利生物説 日

傳授小町 記を丈一中

万屋船六公中 日

松久末の松山 日

菜種の花盛 日

幸濃浪枕 日

亮三近江八系 日

愛深の王親向松 日

おきん川系松中 日

○田本文弥并阿波を丈分

三株を丈

源忠上人記

曇鸞を師範

大職冠方便の玉

阿弥陀坊

守屋大信

日親上人法難記

中將姫達草陀記

三田八幡寺傳記

志塚抄語

百合若高繁攻

契史國物

長命寺用帳

中山利止物

厚金文七

元禄十八年壬午八月十六日
申仕屋令日九月九日初日

善光寺用帳

照天照採車

當世樣續日本紀

世三同堂棟由来

母中文係同氏波を夫松を夫松を夫一中等ハ
何止も定所古依極又ハ井上氏の傳りりとも分

らるゝ新紀多ク別れて中の身子之を伝ふ者又
竹本を竹の世傳する人々を伝ふ者一様なり
ゆへ一生此る新紀又後續の時代なりと断るべし
と云ふなり

○宇治加賀極 嘉をまゐり 兼門身家の分

大磯虎道世記

小晒物緒

百人一首

西王母

一心五戒玉

身替問答

融大臣

今川了俊

榎本元

大佛供養

西行抄

深殿

吉備大臣

淨土寺八坂塔

倭寇

和田軍

中將

柏崎

弓削道鏡

當流小栗地

之服者我

阿弥宗任東大全

日本武尊

小袖乃衣

夜通姫和光玉

三井寺狂女

十六夜物語

法明道通行下

夜討乃衣

摩耶山

公皇御金

小室道風額揃

法隆寺因縁

弘徽殿嬪姫抄

源頼家

神武帝御正月

藤原守忠彦

惟孝惟仁佐藤

大原同春

三社乃統宣

須磨寺多葉笛

富貴乃家

門出八傳

浦嶋太郎七世縁

遊行上人衣号記

曆

蒲冠者鞠物

賢女相生松

弱法師

後御草

いろは抄巻

天神御本地

多羽恋縁抄

世継乃我

いづるのついでに
わが世にわが
わが世にわが
わが世にわが

外題年監

公卿集

伏見常盤

葵の上

藍深川

凱陣八嶋

東山殿子日遊

本領る我

閑亦小六東云法

并慶京土產

平安城都遷

頼朝由井演也

おろの 哥念佛

呉羽中將北三夜侍

る我七ツ以呂波

来原女之舸

津戸之即從生要集

遊君二世相

源二位頼政

葛葉道公物語

白馬判官盛久

固崩る家

義経懷中硯

赤水忠則

刈萱道心物語

續城七弟小神實

小原年監

十三

石山寺用帳

豐田
富松

石岡煮房漆

上三

新腰越新狀

日

新波五人男

日

西明寺殿行脚松

富松

傾城姿見池

日

夕雲途乃被

日

富士溪同拜樂舞

八椽修治並物經

日

幸傳一本松

日

白髭赤令媛慈

日

梳久程乳室

日

魂產天親音

宇治

誓願寺名号記

宇治

女人即身成佛記

口

傾城今面形

口

傾城八重櫓

口

鞍馬山師弟杖

日

石山寺花櫓

口

玉王變七人仁經

口

南都御親奉

口

念佛往生記

日

忠臣男替物語

口

遊初念佛記

日

名目録

十四

損改歌道府 世田 田舎 傾城我立 立

傾城浅間嶽 口 龍城連理袴 口

傾城浮洲岩 口 三井古豊年燦摩 口

八幡文和光白旗 口 南大門秋彼屋 口

大黒天万宝所藏 口 大和歌五穀之紙 口

愛宕山旭峯 口

傾城紋日曆 口 忠臣傳呂波夜討 立

関東小六丹前次 口

かき吏の先師伊勢傳文内傳るりも江戸の太さるま
おと回ふこ又区続の外縁をす及ん文内門人伝を史
伝ニ系辭とそ一人京師の世にる芝居と興新一冬勤
るれ一を板敷の石か板と井上氏との傳るりと傳る
る一と又かか板牙子野田新板や世七本松系を伝る
芝居の太さるる久く勤るる一を新傳の傳るり多う
るれ一と又かか板牙子野田新板や世七本松系を伝る
芝居の太さるる久く勤るる一を新傳の傳るり多う
るれ一と又かか板牙子野田新板や世七本松系を伝る
芝居の太さるる久く勤るる一を新傳の傳るり多う

上貞年監

二五

○道吳全吉大塘節

葉東同春

稷西八節

三原合戰

○表具又軍節

本名義仲

難波八景

紙洗小町

忠臣出揃つひのそろう

右乃安人井上氏の傳なりと多分認めらる

○竹車世老史乃根蔕芝蔕乃字保軍

辨宮東門阿波唱戶

鉄貯槍現
五

以人乃能堪之芝吾國初有之帝古澤遠

○俘後山所極芝居る高流

前四妻傳都遷

享保十七壬子年十月廿
初日

孝謙天皇傳文禮

是公外郎の如く斗て
けりより芝居り絶たり

○明石越後乃根傳芝居る

三軍格授原

延享二年乙丑十一月十三日
細日

延喜帝秘曲既臣

○陸行小和泉芝居乃根城る

歌枕疎磯花合戦

延享三年丙寅八月三日

唐令衣古馬東蠻

女舞劍紅葉

鎮西八郎射社来

いふ古代ニ虎居る史次ニ陸奥居る史ニ井
永傳市史行本原史史辰書八郎居る
芝居奥好ちりり何れと井上作本の傳あり
と傳れりるるる彩化と又又及り

○江戸豊竹肥前掾 新左史事

享保十九甲寅の年江戸表三芝居
年乃乃八若松丹後掾と云々代々芝居と
由りやれと及又辰松氏の芝居にて
勤めらるゝ元文年中今の芝居と求
善清成然一を竹肥前掾と云々清と新と

に櫓幕と扱れり尚存新清りの外

石橋山鑑重 よしひさ 義経新合持

堀補日蓮祀 小山判官 信太左衛門 新板重物語

虎の宴守 濱の浪守 八幡左郎東海親 親衛 新合持

十日男 太平記枕詞

尚存三張江戸表乃外記辰松表は採

芝居は三十三年の月八何れも大坂竹本
豊竹あやの新澤よりをと替り
小鞠くぬ新化乃外記と見え及に

○京都竹本義を史芝居

宝曆三酉すまふあふ大坂竹本新澤より

花京界都鑑 宝曆十二年二月廿一日

契書何こや書 宝曆十四年申ノ正月

京都二市娘形氣 同年四月十七日

○當流竹本筑後掾 義を史事

竹中義を史ハ掾乃天正寺村豊家の
出産成ーう若年の比々井上掾
の澤沼理成好く修められ延宝

年中大坂虎屋新主更之指と勅
天和年中京於より宇治加賀
極之指と勅あり貞享二年大坂
攻め道新堀より自分櫓城揚て常
是指成豊初より水主後飛城極と
文政より家初貞享二年より

昭和四年を八十二年あり而して
豊昌より家初より初より清より初日
年月日小及ひ他より又の名をきき
の世を延唐妻細記に

世継る我
貞享二年乙丑二月初日習
宇治加賀極方の吉澤より

益深川
右日記
日年四月八日

いろは物語

右のり

同年七月十五日

賢女手習鑑

井上播磨極方の古澤より

同年九月廿一日

頼朝七騎落

右のり

同三年二月二日

出世景清

同年二月四日

是近松門左衛門竹中義方より新澤より傳の
初ありは是より近松氏より新澤ありは是より
なり多分新澤とせしなりあり當長京朝

依々木大鑑

同年七月十五日

多田波仲記

同年九月十三日

達磨の本地

貞享四年丁卯年正月八日
為三月分中五路より旅なり

源氏冷泉節

貞享五年戊辰年正月二日
為長江及び大津より傳なり

大塔宮鑑書落

同年九月改元
元禄元年十月十二日

定家郷小倉文紙

同二年正月二日

天智天皇

為夏泉及壞子紀乃、仍 同年三月三日

今樣柏木

為冬系於此 同年八月十五日

自然居士

元禄三庚午年正月五日

源氏十二段

為夏秋壞 同年三月三日
奈良 初及、仍

續談記

同年十月十一日

今樣柏崎

為春系於此 元禄五壬申年正月二日
七の社、仍

日本西王母

為秋冬系於此 同年四月八日
中系、仍

愛子若都富士

元禄六癸酉年正月二日

平假名太平記

同年三月三日

新本領名我

為秋冬系於此 同年五月六日
初及、仍

韓慶出生記

元禄七年甲戌正月九日

松尾東帶濫

同年三月三日
為夏系於此 同年三月三日
初及、仍

秋衣別為實盛

元禄八年乙亥正月二日

多田院開帳

同年二月六日

秋迎延生會

如來 為夏秋塚奈良初及市、仍

同年四月八日

謙田兵衛名不盛

同年十月十二日

忠信廿日正月

為夏秋塚奈良初及市、仍

元禄九丙子年正月八日

當麻中將如

為夏秋塚奈良初及市、仍

同年四月十四日

義經追苦女翁

同年九月九日

形源市山極威

元禄十丁丑年二月初日

新板腰鼓狀

為夏秋塚奈良初及市、仍

同年四月六日

賴朝侍至日記

同年七月十五日

百日為我

同年十月十三日

初八國廟為我、号也、為新中法加繁極
淨、より、近相氏の世、一、定日一百日

お勤め—カノホ—とて百口多我
云け時分八百目と勤め—とて改めカノホ

今様小栗判官

元禄十戌寅年二月十四日

小姓道風記

同年五月八日

義経東六法

同年六月五日
あ秋伏尺中書治文子修勢、行

源氏烏帽子折

元禄十二己卯年正月二日
あ春前夜、行

本海通虎石

同年五月六日
あ秋使中書治文子修勢、行

浦清年代記

元禄十二辰年正月六日

淀親出世漫傳

同年四月八日
あ夏場、行

周情素師傳記

同年九月九日
あ春分、行

蟬丸

元禄十四年辛巳六月六日

竹本美老史後松原城、
あ秋、行

神託栗万石

同年八月朔日

前十二段七生息巻
切大掛物十幅射

同十九月九日

為我五人兄弟

同至十一月朔日

前傾城八段形
切豊子馬芳万葉

元禄十五午年二月二日
為妻の未伴勢、外

大磯虎雅物語

同年五月十八日

加古友公七墓巡

同年七月十五日

新一公五戒の玉

同年九月九日
東妻、偶々、余、外

西明寺殿百人上擲

元禄十六癸未年三月冒

兼、
切、日本王代記
為組、中

同年五月七日

他、妻、近、松、門、丸、事、つ、そ、世、と、世、所、清、る、の、娘、也
少、く、所、本、氏、古、今、の、大、あ、り、あ、り

兼、
切、収、集、平、太
源、中、高、薩、摩、歌

元禄十七甲申年正月吉

兼、
切、甲、賀、三、郎
中、重、井、局

為、四、月、改、元
宝、永、元、甲、申、年、四、月、十六、日

為、秋、冬、を、ま、ま、氣、休、自、と、ま、で、後、後、極
自、分、の、居、本、あ、り

用明天至職人鑑

安永元丙午年三月二日

方家分竹田出云云極作中まゝ紙の左印と紙に
人形の衣裝と及びるる建末まづて立派な物なり
清入の所を及後後極之味細竹は極之なる
おやま人形居相ハるまゝ出候へどもおやまはわ

雪女五枚羽子板

同午七月十四日

傾城返魂香

同午八月十五日

茶本領者我
切中二枚條系紙

同午十月廿一日

上我絶將暴絶

宝永三丙寅年正月廿五日

茶本領者我
切中二枚條系紙

同午二月廿七日

兼好法師抱見車

同午五月五日

暴絶六平記
同跡遮一紙物

同午六月朔日

名我扇八系

同午七月十五日

茶扇八系三條目と
切大紙原昔曆

同午九月十五日

吉野忠信

宝永四丁亥年二月廿日

茶表龍丸信三辰目と
切堀川波の穀

同年二月十五日

茶今川了後
切おろ免卯月の穀

同年四月十五日

茶根元名我
切後日卯月お上

同年六月朔日

茶源氏十二辰
切丹波と他信家書

同年六月十四日

酒吞童子枕言系

同年九月九日

茶河吞童子三辰目と
切おむめ心中万々茶

宝永五戌子年四月十六日

茶高上あふ伝勢、以新り、今傳中支内
茶民宮治り

今川制親系目

宝永六丁丑年正月二日

茶今川三辰目と
切上巻千日ち中

同年三月三日

茶新天報
切緊取善分舟 為長伴勢、以

同年四月八日

紅系将鈕本地
為冬依之中書治り

同年九月九日

为我虎石磨

宝永七庚寅年正月二日

虎石磨三原目と
切中水の初日

同年正月廿二日

大原河谷寺系笛

同年三月四日

石合系此守流

同年五月六日

系此寺の流三原目と
切中水の初日

同年六月十六日

系根元寺我三原目と
切中水の初日

同年七月廿四日

新よりは物語

宝永八年卯年正月九日

系より片三原目と
切中水の初日

同年三月五日

吉野都女楠

宝永九年卯年九月十日

系傾城掛物語
切中水の初日

西暦二主辰年三月四日

系公和分竹政寺と
切中水の初日

弘徽殿物語家

同年五月五日

二石 姫山姥

日年七月十五日

傾城吉岡深

日年十一月二日

河内玉姥火

西徳王愛己年正月二日

天祚祀

日年二月十五日

今夏及冬は夏初に少雨の後と方おあまといふと改む天お山と云ふなり

孕常盤

日年七月十六日

新撰大職冠

日年十一月朔日

相摸入乃千匹犬

正徳四年甲午年四月八日

後口 城方加敷多

日年八月朔日

後後極事あ八月中旬より、病氣あり、川に
係中よりおけり、終ふああり、十日、日年一
あ千匹犬とて死なせり、此法は、衆道と云ふ
なり、けし、まゝ、此、身、の、あ、ま、ま、二、五、年、より、あ
正徳より、正徳三十九年、より、あ、ま、ま、二、五、年、より、あ
掛、り、あ、ま、ま、二、五、年、より、あ、ま、ま、二、五、年、より、あ

落奥茂を文長崎重を文二井考を文奥河
源を文内通記を文竹本難波を文竹万を文
竹本難波を文竹本難波を文竹改を文
竹本考を文竹本考を文竹本考を文竹
年一小時りてはとわく水くく水く
後後後死後の分

嵯峨天皇并嘉雨 日年十月十五日

比差のち文竹本難波内通記を文竹本改を文
竹万を文竹本考を文大和を文通記

二人静胎内探 西暦五七末年五月二日
高良修徳外

持統天皇歌軍法 日年八月初日

筑後振芝居奥河内を文二年乙未年二三年の間
井上氏を文氏先師を文の勤れ一修り凡そ六十歳
余も修り一修り凡そ六十歳余も修り一修り
氏に及ひその他の勤れ百歳余も修り一修り
掛く芝居を勤り一修り凡そ六十歳余も修り
去や一修り凡そ六十歳余も修り一修り
文竹本難波多川源を文竹万を文竹本難波を文
文竹本改を文竹本考を文竹本考を文竹
の勤れ

父八重 國性爺令戰 初 享保五年乙未十一月朔日 日 三年越十七月朔未申月 國

九仙山竹中抄母 内西段を文竹中を文三松 落伏二二三 辰め日政を文を竹万を文日 張彼 依者近松門内

種 日中 同後日令戰 大幕の上赤幕引初 日 文 享保三年丁酉二月十八日

乃根保公中 乙亥月 同年八月朔日

陰竹三重帷子 同年八月廿二日

聖德太子繪傳記 同年十月十六日 文を文退所

山崎与公勝表門松 享保三年戊戌二月二日 大和を文再出所

日本振袖初 同年二月廿二日

乃我會稽山 同年七月十五日

日蓮上人記 同年十月十二日 同十月

傾城酒吞童子 日 十月廿五日 依を文初テ出所

栲多小女御浪枕 同年十一月廿日 國を文出所

長光寺堂供養

同年十二月十三日

本邦三國志

享保四年己亥二月十四日

女後寬

平家女權

同年八月十二日

源系蛙合戦

出於大和太夫ツレ國を夫ニ終る候云云

同年十一月六日

國性翁合戦

二交目 享保五年庚子三月二日
九仙山に母ニ終るニ子孫候云云

井筒河内通

出於大和太夫ツレ國を夫ニ終る候云云

同年三月三日

双子隅田川

同年八月二日

日本武尊東鑑

同年十一月四日

陸奥を夫再勅

小石川中綱

同年十二月六日

父を夫又出

松澤國史婦池

享保六年辛丑二月十七日

女教油地獄

同年七月十八日

同七月

信忍川中鴻合戦

同年八月三日

山を夫再勅

唐之彰今國性爺

享保七年壬寅正月二日
式古夫出產

浦鴻年代記

日年三月三日

公中育庚申

日年四月廿二日

祇王祇女佛沛系麻軍

日年九月朔日
尚冬養之夫退產

大塔宮職鑑

享保八年癸卯二月十日

本吉櫻町昔名記

日年十二月廿四日

將軍太希良門
出羽冠者賴平関八次敷系馬

享保九年甲辰正月十日
日年三月

尚三月廿一日大坂中大火芝居於燒死四月八日。假芝居
之酒吞童子持統天皇相摸入乃十日替ふお勤り

三國志大全諸葛孔明 鼎軍談

日年七月十五日

右大將藤倉家記

日年十一月四日
尚十月廿二日近松門あり死

出世奴雅抄諸

享保十年乙巳五月九日
和泉之夫退產

復島羽衣塚

日年六月十八日
表之夫出產

比年以來史大和太史文太史文太史文太史文太史文
 比年以來史大和太史文太史文太史文太史文太史文

及
出
下

前漢より鼎軍談 正月 国々

小野炭焼 七小町
源義士墓所

三莊太史夫人孀

工後たふ富日記

加賀國篠原合戦

尼律者由井溪出

大塔文賦體
二五目

眉間尺象鼻

京土産名所并簡

三浦大如紅梅約

享保十八年庚戌二月十五日

信及妹捨山

同年八月初日

須磨都源平磯濁

同年十月十二日

國性爺合致

二交目 享保十六年辛亥五月五日
天海貝二負組の表に和十幟ヨリ

鬼一法眼三略卷

同年九月十二日

増補用明天皇

享保十七年壬子四月朔日

港入公港改を夫三法を二布かき人形相竹に云

伴達深子綱

二交目 同年六月八日
お清より信大おち布

檀浦兜軍記

同年九月九日

大田裏大友真鳥

二交 享保十八年癸丑二月初日
同三月十二日大和方夫更に

大平記 車返合致様

同年四月八日
和泉方夫又おち布

今方大益を七人形に 同六月廿日芝居大組家芝居より
おさねの親おち仕初め 二交事松方より一系鬼一法眼國性爺

松山 元日合年紙

同年十一月十五日
七交更おち布

應神天皇八白幡

享保十九年甲寅二月朔日
改て天皇を夫と名づけ

河内通

同年六月八日

蘆屋道備大内鑑

同年十月五日 庚申年
三輪を夫と名づけ

今より初平の人形の類より初平は初秋より大内鑑

甲賀三郎室物語

享保七年乙卯九月十四日

赤松園心縁陣幕

享保七年丙辰二月朔日
史記の縁を進めたる縁の表縁初

享保七年乙卯十一月を夫と名づけ 後天記に具加松
勅許を授けたりと云ふ縁を夫と名づけ 三徳縁を夫と名づけ

敵討檻樓綿

同年五月十二日

下縁より四季十二段出給和泉を夫と名づけ 三徳縁を夫と名づけ

後九を夫と名づけ

同年十月十三日

佛願極地川夜討

元文二年丁巳正月廿八日
上総極地極地を夫と名づけ

大改入道名庫岬

同年十月十日 十二月に

行平源馴松

元文二年戊午正月廿五日
和泉を夫と名づけ

小栗判官車街道

同年八月十九日

元文四年己未四月十一日

引くか盛衰記

元文四年己未四月十一日

鳥を夫初て出産

今川本領楠磨館

元文五年庚申四月十一日

将門冠合致

同年七月朔日

七月国を

新百日月有二家

同十一月十一日

切意八卦相曆

近松門のあ十七日忌連高

伊豆院宣源氏鑑

元文六年辛酉五月十四日

百合を夫紋を夫初て出産

新うけ書抄

寛保元年辛酉五月十六日

いふは勤くふけを夫初て夫百合を夫高を七方夫は片は
播磨縁内を夫紋を夫七を夫之縁高は二弟小お勤

新衣いふは縁起

寛保二年壬戌二月十四日

玄冬内匠を夫退産

室町千重子

夫婦池之二月日 四月十七日

出語を夫はを夫ツレ高を夫三縁高二弟

男化五原令

同年七月二日

高縁高はを夫出を夫退産

入鹿大匠皇加輝

寛保三年癸亥四月六日

四月国を

丹次爺少栗

同公入り十八日

大内表大友真多

三 同年十月五日
目 以て夫初て出たてにを三番

記源氏道中軍記

延享元年甲子三月
延享元年十月十五日

切 横磨極進長

二 同日 同年十一月十六日
綿子史出た 和作を頼り 頼子史出た

切 横磨極進長

三 延享二年乙丑二月十三日
切 横磨極進長 出た 延享二年乙丑二月十三日

軍法富士見西

延享二年乙丑二月十三日

其冬浪花鑑

同年七月十六日
同年七月十六日

楠昔新

延享三年丙寅六月十四日

佛法前之解軍

同年五月四日 初日法示

切 延享三年乙丑三月

延享三年乙丑三月
切 延享三年乙丑三月

菅系傳授多習鑑

同公入り十八日

傾城枕軍鑑

延享四年丁卯八月廿三日
文字を文位のを史出た後を史出た

義經千本様

同年十一月十六日

似名手本忠臣藏

寛延元年戌辰八月十四日
南十月廿五日
夫婿之妻百合之妻夫之妻

蘆花道満大内様

同年十一月廿二日
同十月十日

高冬大隅極再勅内近を夫より千賀を夫長門を夫去依を夫
出を夫改を夫綿を夫依を夫上を夫又を夫文字を夫退を

栗鴻濤嫁入離形

寛延二年己巳四月十八日
同出離を夫大隅極を子賀を夫下

双蝶々曲輪日記

同年七月廿四日
高冬三味を夫高冬三味を夫

源平布引様

同年十一月廿八日
高冬上総を夫死に

國性爺合戦

同五月
寛延三年庚午七月十六日
九仙山大隅極を子賀を夫三信を夫無を

文武世継梅

同年十一月廿四日
今ノ紋を夫初テ出を

恋女房深分り様

寛延四年辛未二月朔日
六月同を

道成寺所伝事
吉田文三市大鼓吉田文三市大鼓吉田文三市大鼓
盆分切探踊 人形 同年十一月廿五日
小鼓相作門を夫大鼓相作門を夫

没行高太峯様

同年十一月十五日
大隅極大和極を愛を夫

名筆傾城鑑

宝曆三年壬申三月廿三日

世旅言漢楚軍談

日年五月十八日

歌耐襪襪綿

二六目 日年七月十六日
ふゆより川中流三匠目と

伊達錦五十四郡

日年十一月十六日
まを丈薩奥を久公在

愛護雅名歌務閑

宝曆三年癸酉五月五日
必を丈綿を夫系歌初組を丈初を丈初を

草蒲前探弦

宝曆四年甲戌二月三日 日年
大和根上系薩奥を丈初を丈初を丈初を

小袖紐貫練門平

日年四月十七日

彩了以書物終

二六目 日年七月十六日
佐佐木丈退在

小野道風青柳硯

日年十一月三日
保を丈家を丈初を丈初を

前相模入道

宝曆五年乙亥七月十六日

後庭涼探在浦

大和根奥系

前柏子前淨瑠璃合

日年十一月十六日

日年忘在丈探

友を丈丈初を丈初を丈初を

崇徳院瀧波傳記

宝曆六年丙子二月初日
綿を丈上系表を丈仲を丈初を

鬼一法眼三畧表

二月日 同年六月朔日
播磨板十三面忌迄表

男化五原令

二月日 同年八月二日
於多根落芝居 改を丈上京

平惟茂凱陣紅葉

同年十月十五日
十如を丈知を 十一月国を

姫小松子日の遊

宝曆七年丁丑二月九日
改を丈京今細三候 聖派表八か所

薩摩の女妓遊

同年九月廿日

大和極上京百合を丈再勤も時出勤の系改を丈源を丈
あつを丈源を丈百合を丈段を丈中を丈源を丈あ

昔男喜日世小断

同年十二月十五日
表を丈京今改

敵討崇禪古三場

宝曆八戊寅年三月十日

菅原佳史子習遊

二月日
同年五月十五日

名振遊して二月月勤め

七月十五日夕及夜

怪小崎武勇向合

同年八月十九日
大和極京今改

日高川入相花王

宝曆九己卯年二月朔日
大和極吉田文三郎依

為五月四日芝城新焼や
少く太日高川口辰目と切
用明天皇職人温と一辰五月十五日より出
古より政を更人形ゆきひ高田文吾為室七月
人形吉田文三印同文吾父子より退る

太平記菊水の巻

日年九月十六日

時常大和掾又上京者文更神を文初て知を
人形吉田文吾再勤する事と名と改む

望る盛衰記

二文目 宝曆庚辰年五月廿日
竹本播磨掾十七廻忌

極彩色娘扇

日年七月十五日
八本を文初て知を

茶国仕爺三辰目と
切年忘る浦操

日年十一月廿八日

為根常芝城より文更神を文初て知を
高き文ハ本を文初て知を

安倍晴明倭言系

三辰目 文更神を文初て知を
三辰目 文更神を文初て知を

由良漆十軒長者

日年五月十六日
綿を文初て知を

為九月堀のりくふ盛衰記此日のる

冬菟雞波梅

同年十月廿一日

人形歌見世夜芝居十日ありお供とむ
有田より求名改文三席と云はるは曉乞知まひ

古戦場清熱如松

同年十月廿六日

高契方丈新を更に出
故方丈中を更に出座

慈女房深分手綱

二玄目 宝曆十二年七月二日

政吉夫上京百合を更に入ま

奥州安達系

同年九月十日

政吉史由系

假名手印忠臣蔵

二玄め 同十三年六月十日

高正月九日竹田芝居新焼三舟竹中彦
お加り帰るより竹田より竹田より竹田より
折込七切進出―振文ツツツ

初山城國富生塚

同年四月十三日
生約を夫より深分より更に出座

後天竺德無御鏡ミタマシヅメ 破去久矣

前後一日替り

旅諸葛孔明鼎軍決日年八月三日 二臣目々中左夫返在

後決前参り淨極理相撲大和極一世一代三味 廿八

九月十八日切とて瑞、新

御所様堀川夜討 日年未十二月九日

松月十八日切 高中年彦中江戶表、新

京将二重娘形氣 日十四年申五月廿八日

京都新化老京彦中大坂、引お勘 因老夫初、出彦

江戸様老敬る我 日年十一月十七日

江戸表、切夜又日重十日、石お勘

假名手忠臣表 日同十二月廿六日

榮奢待新田系

明和二年丙二月九日
妻在夫家、仍

愛護雅名歌傳國

同年八月六日
二五目 妻在夫家、仍

冲急被柳寄車操

同年六月十八日

苗七月十日竹中改在吏死云

姻袖鏡

中在夫家
同年九月十二日

舍相云役者双云

同年十一月二日
陸在夫家、仍

雲月十八日之場表、仍

事始室又順

同年十二月七日
場在夫家、仍

本朝北田孝

同和三年戊辰月十四日
修在夫家、仍

前兒源氏二辰目之

同年八月十九日

小夜中山鐘由來

同年七月十八日
組在夫家、仍

右平記忠厚海澤

同年十月十六日

四天王寺稚木像 日四年亥月各

夏祭浪花鑑 二亥月 日年亥月十日

新元軍來永春 日年八月四日
後園殿千西帳 坊作部八日

石川又右二伐喇 日年十月十日
糸部太史部下クお勤

糸部小田原太史 日年十二月十日
梅列殿下奉司 糸部太史内太史部

中書又江分改改方又下改方

○為流豊竹銭糸少極 初ハ長考と
思ふ

道板坂之芝糸舞の始めハ縁十三年の此
成井上之江竹本ホの先師達の津留橋と云ふ
ころ傾城懐内子是新能の初之京新調紀別
南都ホホも芝糸と舞のやれ後ハ縁十五
乃板坂之芝糸と舞の京新調紀別の外と云ふ

東山殿子日記

元禄十三卯年三月十一日

源三位頼政

右日記

日年五月六日

大職冠知略玉取

日年七月十五日
井上揚磨様古澤より

傾城懷子

新作

日年八月十八日

依木大鑑

竹本鏡後様古物

日年十月十三日

前未廣十二段
切心中殿の玉の井

元禄十五年五月十八日

前源氏鳥帽子折
切金金の赤澤名額

日年八月朔日

東岸居士

日年九月九日

新百人一首

日年十月十八日

前兵庫築嶋
切井筒石源六郎多晒

元禄十六癸未年二月七日

今様殺生石

富妻泉及堀、外

日年二月十五日

坂上田村磨

日年五月五日

今川青砥刀

日年七月十五日

信太妻女占

日年九月十五日

熊谷三子盃

日年十一月朔日

増補佐々木大膳

元禄十七甲申年正月二日

前東大金

日年二月十五日

切首屋を七哥祭文 為四月宝永十改元

いろは始千丈滝

宝永元甲申年六月朔日

女長田卓橋

為秋奈良、仍 日年七月十五日

傾城富士嶽

日年十月廿一日

英波森物語

宝永三乙酉年正月二日

三井寺狂女

日年二月十五日

泉沢枕物語

日年四月八日

傾城二河白道

日年七月十五日

曾我三部經

日年九月九日

播忍曾根松

日年十二月廿八日

傾城鄭蜀岡

室永三丙戌年正月九日

前紀三井古閑此
切男色加茂侍

日年三月四日

前元服名我三條目
切外市梅田心中名根崎彩如是病也

日年四月十二日

聖德太子舍利都

日年六月二日

前舍利都三條目
切傾城十日ノ鐘 為秋ノ聲 為宮崎ノ物

日年七月十六日

增補富貴名我

室永四丁亥年正月二日

前増補日向景清
切淨瑠璃古今序

日年三月三日

今様女袖襖

日年五月五日

頼朝七騎落

日年七月十六日
為秋泉忍堀ノ紀忍ノ物

身替問答

日年十二月十八日

今様西行物語

宝永五戊子年正月九日

前新利屈物語
切枕久未の松山

旧年三月三日

秦始皇帝太夫松

旧年七月十五日

三柳右更忍著漆

旧年十月十三日

前藍漆川
切敵討難波梅

宝永六己丑年二月五日

富仁親王嵯峨錦

旧年六月朔日

前嵯峨錦三辰目と
切笠屋三勝共五年忌

旧年八月九日

赤染清心采花物語

旧年十月三日

頼光新跡目論

宝永七庚寅年正月二日

前跡目論三辰目と
切心中亥の中道

旧年三月九日

佐々中山夜泣石

旧年七月十四日

前夜泣石三辰目と
切枕久未谷笠

旧年十月十六日

本朝五翠殿

宝永八年卯年二月廿日

前五翠殿三原目と

勢

日年四月八日

切油屋お染袂の白後

のり長城、仍

北國源氏金の山吹

正徳元年辛卯九月九日

平安城細石

正徳二壬辰年正月十六日

前義戸前陣

切今宮丸腰連理松

日年四月八日

前信の源氏

切新被太夫丸

日年五月十七日

前杉浦五郎

切七枝五妻雛形

日年七月十六日

八幡太郎东初様

正徳三年癸巳二月朔日

傾城國性爺

為秋奈初四糸、仍

日年五月六日

仁徳天皇万葉車

日年七月十五日

前播磨曾根松

切傾城三度笠

日年十月十二日

鬼鹿毛武藏證

日年十二月朔日

八景三遊

三十一

小敦盛花歌

正徳四甲午年四月朔日
為長泉及堺、仍

御前名我姿富士

同年七月十五日

愛子若璚箱

同年十月朔日

吉野忠信錦着長

正徳五乙未年正月廿日

前吉野忠信三辰目と
切傾城思并居

同年五月五日

記録為我玉筭曲

同年六月二日

天智天皇豐年秋

同年九月十日

鎌倉尼將軍

正徳六丙申年二月朔日
為七月享保下改元

花山院都巽

為冬奈良、仍
享保元丙申年七月十六日

甲陽軍鑑今様粧

享保二酉年正月三日

西行法師墨染櫛

同年五月二十二日

照日前都姿

同年九月二十八日

後倉三代記

初日 享保三年戊戌正月二日

今年を夫木上野が極最系重務と云々
は弟ハ世を夫万を夫丈を夫木お前

傾城衣系雀

旧年八月朔日 十月国

今振賢女手習鑑

旧年十一月五日

義經新子鑑

享保四年己亥正月廿日

神功皇后三韓装

旧年五月十五日 尚秋泉州課

業平昔物語

旧年十一月朔日

鎮西八市唐土船

享保八年庚寅正月二日

富仁親王源流綿

旧年九月三日

日本傾城始

旧年九月廿一日

三輪丹前録

享保六年辛丑正月廿日

伏見常盤昔物語

旧年八月十六日 七月国

外題

五十四

兵部軍符比翼其公

同日九月十四日

大友王子玉在靴

享保七年壬寅五月二日

公中二ツ腹帯

同日四月六日
高島秋陽より記及、外

東山殿室町合裁

同日十一月朔日

玄宗皇帝遠幸御

享保八年癸卯五月廿日

口限月出諸老夫上登極

祀祿る我

同日八月六日

傾城毎回鐘

同日七月十八日

日本建仁寺供養

同日十一月三日
内通す
三輪を走初る、外

頼政遠る芝

いふ原を夫在世を夫た内木也

同日四月

高三月廿日大坂中大火芝居も焼く同日廿三日小坂の芝居も焼く建仁寺供養 夫々又る高修新地も

六月廿三日小坂建仁寺供養 頼政遠る芝

けり高修新地へ芝居を賣地と買求め高修の同秋中

高修も芝居を賣地と買求め高修の同秋中

の芝居も乃外題

女蟬丸

享保九年甲辰十月十日

切昔采万石通

享保十年乙巳正月二日
お浄より女蟬丸三度目やま

南北軍同参

旧年三月一日

身替弓張月

旧年八月六日
和泉を夫ふを夫初てお存

大佛殿五代礎

旧年十一月二日
苗を京於より源金三代記

曾我錦儿帳

享保十一年丙午二月朔日
新を夫初てお存

北條時頼記

享保十一年丙午四月八日
末未正月四日

切雪乃辰

お夫上地塚ワキ和泉を夫三法地塚森八郎
おきい人形及井小三郎近中九八郎中村を夫
いそ即森世を夫おを夫三輪を夫おつとむ
佐者西沢一風並本云助安田姓文

清和源氏十五辰

享保十二年丁未二月十五日
旧辰目格侍太夫ワキ三法太三ツレを夫

攝津国長柄人柱

旧年八月十五日

切芦新出結

お夫上地塚おきい人形及井小三郎
ワキ和泉を夫三ツレを夫 地沢森八郎

尊氏將軍二代鑑

享保十三年戊申二月初日

南都十三鐘

同年五月十五日
尚秋冬ふふに仍舊和源氏時記長柄人往

後三年奥羽軍記

享保十四年己酉二月二日

后原秀卿係系圖

同年九月十日 九月 國三
切ニ出治方夫上世極ワキ秋泉方夫三三三竹沢為四席

蒲冠者為戸合戦

享保十五年庚戌五月廿日
切ニ出方夫上世極ワキ秋泉方夫三三三竹沢為四席

本胡檀特山

同年五月六日
切ニ出方夫上世極ワキ秋泉方夫三三三竹沢為四席

楠正成軍法実録

同年八月九日
切ニ出方夫上世極ワキ秋泉方夫三三三竹沢為四席

源家七代系

享保十六年辛亥正月二日
切ニ出方夫上世極ワキ秋泉方夫三三三竹沢為四席

和泉國浮名海池

同年四月二日

酒吞童子枕云葉

同年六月朔日
切ニ出方夫上世極ワキ秋泉方夫三三三竹沢為四席

赤沢山俘友傳記

同年十月十六日
切ニ出方夫上世極ワキ秋泉方夫三三三竹沢為四席

南九月廿日太夫年 夜ふか倍蓬葉山 切ニ出方夫上世極ワキ秋泉方夫三三三竹沢為四席

八百屋お七京排極 二日目 享保十七年壬子正月七日
前鎌倉三代記三日月と 漢を夫初テ出テ

今様返魂香 同年五月七日 五月国子

待賢門夜軍 同年九月十日 尚冬和泉大夫三橋を夫返テ

最古世忠信 三日月迄 享保十八年癸丑三月二日
要大夫初テ出テ三日月迄の表進格初ノ儀

切お初天神記 叙多し出テを夫越前縣ノ漢太夫
おつひ人散居井小三郎三張竹沢を四郎

鎌倉比事書紙張 同年四月十五日 伊を夫出テ其地

芳吟人吾妻雛形 同年七月十四日

切忠臣金經冊 同年十一月朔日 又を夫河内を夫ト妻名に

北條時頼記 二日目 享保十九年申寅二月二日
正局の床ヲ横床ニする

切雪乃伝 左支越前極ツキに因テ夫三張竹沢を夫
おき人形を井小三郎といふ中村初更

苗目我昔見其書 同年八月十三日 尚冬を伊を夫返テ

那須与市西海硯 同年八月十三日 尚冬を伊を夫返テ

南蠻後友目貫 享保七年乙卯二月七日

清和源氏十五辰

日年二ノ十二日
格は左夫越ち極ワキに四左夫ツレ候左夫

万屋助六二代今秋

日年又ノ六日

所萱葉門後葉葉

日年ノ十二日
男左夫初ノ初

和田合我女露露 享保七年丙辰三月四日

安江宗任松浦登 元文三年丁巳正月十八日

釜淵双級巴

日年七月廿一日

和佐左夫初ヲ出左綿武ヲ

糸

輝九
傾城左同降

日年ノ十二日
末年ノ十二日

丹生山田左海叙

元文三年戊午四月八日

右の條より暫くお初之孫普清三付又月六日より
より根條新地にて和田合我と八百屋お七恋緋梅と
勤め一門ノ普清成終一終造之孫ノ七月十
又日ノ又丹生乃山田とお初む

新宅祝義出終

左夫越ち極ワキ候左夫約左夫
三未せん 所は左四席

苗床中隠井戸

日五十一
要之丈五尺

奥州秀衡有髮髻

元文四年己未二月一日
佐後之丈七尺

建仁寺供養

日年五十六日
倭之丈五尺

獲夜衣能答答初時

日五十一
南之堀の和申金銭女孫持

鵜山姫捨松

元文二年庚申二月六日
佐後之丈五尺

本田義光日本鑑

日年四十七日
松之丈五尺

武烈天皇職

日年九十一日
依之丈五尺
依之丈五尺

本朝初女扇

元文六年辛酉三月四日

吉梅擇食盛

日年五十一日
依之丈五尺

播州四屋補

日年七月十一日
依之丈五尺

田村磨於麻合戰

日年九月十日
依之丈五尺

依之丈五尺
依之丈五尺

百合雅高麗軍記 寛保二年壬寅三月四日

切之文鴻八景必語 左史田原左史
ツレ文字書夫 三弦此次八景

道成寺現立隣 日年八月十一日
越ふ極治を夫にたふゆり

豫倉大系圖 日年十一月二日
本妻より書けり大系圖谷之國語に書き置

風俗太平記 寛保三年癸亥三月四日 日年四月
四月同

久米仙人吉野稿 日年八月朔日

潤色江戸紫 延享元年甲子四月二日

枳古純信正旭車 日年九月十日
乃古夫妻古夫妻乃古夫妻退死

遊着衣紋鑑 日年十二月二日

詩近江八景 延享二年乙丑二月朔日

増補大佛殿瓦代礎 日年九月四日 陸奥を夫に

浦嶋古事倭物語 日年八月九日 十二月国

北條時頼記

三六目 延享二年乙丑二月三日
式三番三ヲ勅公停勢去夫也丁出所

切害の辰出諸越ちか板ワキ内至和改上時板三益時辰表帝
去夫元二世代六十五才出も人形表并小八分日十三部若所表九帝

酒吞童子出生記

延享三年丙寅五月六日
尚秋京以難ち板一世代久米仙人吉野板

花代藏流鴻

旧年十一月三日

裾重紅梅服

延享四年丁卯二月十三日
上急去夫出所故去夫

万戸將軍唐王日記

旧年二月十四日
後去夫初出所上世文字去夫延在

悪源左平治合戦

旧年七月十五日
旧辰月三探漏と仕初う人形方表松原所表并ホ

容疑出入湊

延享四年戊辰五月二日
外去夫出所陳奥去夫延在

東温御持卷

旧年七月十八日十月四日
舊十月去夫元曙三二世代ヲ表東温下悪源太

標良渡辺橋供養

寛延元年戊辰十月十四日

陸奥に去夫傳去夫百合去夫友去夫阿多去夫木出所
約去夫に戸上縁去夫乃去夫元去夫去夫去夫ハ延在
苗冬床改りか勤の去夫由去夫傳去夫伴勢去夫標去夫
百合去夫去夫去夫去夫去夫去夫去夫去夫去夫

八重と浪花候萩 寛延二年己巳三月廿六日

系統供養二原目と

前記和碩新源氏 日年七月十八日前記

切二探大踊いせき及系系掛あふ 崔師の住み

大踊いの趣向ハ三月十八日十九日の二日ニ外記とせ

又六日の間ニ出来仕共並木大助乃ハ熱波者中の御方代奉

十帖物ぐさき市 日年十一月四日

源氏 約太夫に戸金候勢を夫に人給

尚九月廿三日いさまより 八重と史初くわたり

新許史領鏡あふ振振系系改萩萩ニ出流ヲ勤り

切ニし 追長惣を史出流 日年三月十八日より

梅川 郭七 其楓連理松 寛延三年庚午六月朔日

和田合我女舞踊 二夜日年ハハ七日 傳を夫差を文ニ改改和家系系

玉藻前職杖 寛延四年辛未正月十日

浪花文章夕雲塚 日年四月廿五日 六日国書

頼政崩子芝 二夜月日年七月十八日 水探切三踊

日蓮上人佛法海 日年十月十日 百合を夫返流

一谷嫩軍記

宝曆元年辛亥十二月十日
世村出初の元 八まを夫時を夫名改

並木宗補名残作
筑古板泊太夫所を太夫友を太夫
来甲の金分切二踊 若を夫薩太夫佐佐木を夫今をふ薩

倭倭名在系系圖

宝曆二年壬申十二月七日
太夫志加太夫志友太夫志友

雄結勘助郎

宝曆三年癸酉七月廿八日

刈萱幸門集葉

二日年十一月廿一日
目十七を夫志友代の方志友太夫

相馬左郎淳文緒

宝曆四年甲戌二月廿一日
二月廿一日

前義経腰越状
切金例双級巴二交目

日年七月廿九日

天智天皇刈種菴

日年十一月十八日
表を夫友を夫

尚冬に侍所を夫江戸分所り新を夫と而名名
所を夫江戸分所り新を夫と而名名

三國小女帝曙橋

宝曆五年乙亥四月廿一日

双扇長柄松

日年七月七日
切二操踊為秋櫻以候三年奥州軍記

後三年奥州軍記

日年十一月朔日
籍を夫初テ出所

義仲勲功記

寶曆六年子三月十八日十月
切丸菊松並重義并小八郎

甲斐源氏極軍配

日年国十一月朔日
源訪左史初下出左

馬儘足利源

宝曆七年丁丑正月廿六日

前九年奥州合戰

日年二月廿日

清和源氏並改

日年八月朔日

執事極一世二代源氏山伏信信出左と信と心
口年源氏と時を更とより今を友と改て左史

祇園祭禮信仰記

日年十二月五日
丑寅卯三年誠意切

付若出勲義左史初左史源左史付左史十七左史付左史
付若子初左史と名改禁左史恒左史初左史出左

茅源氏嘗塚

宝曆九己卯年三月三日

付若久左史左史左史左史左史初左史出左十七左史
恒左史人形義并小八郎源氏左史竹左史初

難波丸金龜

日年五月十四日
尚冬執事極一世二代源氏

先陣浮洲巖

日年十二月七日
十七左史源訪左史初下出左

楊妃賊賊楊

寶曆十庚辰年二月十日

楊洋國長柄人柱二首

日年八月十五日

祇園女御九重綿

日年十二月十一日

加賀左史 源左史 長代左史 初之左史 新左史 保左史 源訪左史 長左史 長左史 延左史

寶曆十一年二月十四日 芝原新左史 傳

第一右 嫩軍紀 二 切 八重 廣 浪 花 溪 萩

三月十一日 從弟 極 盛 八 幼 公 元

祇園女御九重綿

日年二月十九日

右 八 月 源 左 史 長 代 左 史 初 之 左 史 新 左 史 保 左 史 源 訪 左 史 長 左 史 長 左 史 延 左 史

五月十八日

人丸萬歲皇

日年九月十日

新造 芝原 祝 義 式 三 教 三 半 出 三 八 切 勢 左 史 出 傳 左 史 高 砂 人 形 出 三 八

三好七廣信軍紀

寶曆十三年二月九日

序昭松總澄

日年四月十八日

當時出勸元 若方又約方又 漢方又林森方又
民方又方又方又方又方又方又方又方又方又方又
初方又方又方又方又方又方又方又方又方又方又
後并小方又方又方又方又方又方又方又方又方又

及系秀卿懷系因 宣曆十三未正月冒

南正月方又方又方又方又方又方又方又方又方又

新帝其 三石龍始 曰年四月九日
武三番豐

新建其 方又方又方又方又方又方又方又方又方又

書場右方 紅梅後 曰年四月八日
約方又方又方又方又方又方又方又方又方又

官軍一統志 曰年四月十日

武安場、初九、十二日 約方又方又方又方又方又方又方又方又方又

娘系清八 鳩目地 曰年四月十一日
約方又方又方又方又方又方又方又方又方又

越方追長 統方掇方 約方又方又方又方又方又方又方又方又方又

傳呂波款 義后地 曰年四月十一日
約方又方又方又方又方又方又方又方又方又

此書是乃竹後九章一記戶人記

志以四探軍池

同二年五月十六日

附物手抄例

同年七月九日

尚八月晦日切之右後張成參部奴芝居成

皇魂弓牌經

此初年書二月三日

蘇吉夫十七古足人恒吉夫紐吉夫吉代吉夫
尚二月中旬八夜中停務八部



